

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

③0

故郷の山・五葉山
小学校、中学校への通学
(一、三五一)がうす
らと銀嶺になると、「次
は里にどっさりと降る
べ、ナ」と七、八歳の
わんぱく坊主の心が騒ぐ
のだった。

「急いで学校さ行き、
急いで帰えねばなんねえ
な、暗くなつから、ナ」
「そんだ、そんだ」
わが幼少期、雪は今よ
りずっと多かった。登
校、下校時の肩かけカバ
ンは、さくさくと鳴り、
時には筆箱や教科書やノ
ートがすり落ちることも
あった。(あつ、しまつ
た)

雪は三十センチも五十センチも
降ったから、冬の下有住
た。

しかし、苗代をつくっ
たとたん、ザッと寒さ
(みぞれ)がきて、寒さが
身にしみ、苗の心配をす
ることも多かった。

この苗代田の隣には、
美しいレンゲソウがかわ
いミツバチを呼び、満
開となっているのだっ
た。

「よし、中に入って遊
ぶべ」いい気持ち
すると、「こら、どの
童子(わらし)だ。レン
ゲソウは肥料だ。早く出
ろ！」の声。

終戦時にはひどく食糧
中流にはヤマメ、ウナ

七合目になるとタケカン
バの林となる。
シャクナゲ山荘を過ぎ
ると平坦になり、やがて
山頂となる。山頂はとて
も広い。もっと進んで日
の出岩前で記念撮影とな
る。

あたりは、オオシラビ
ソ、コメツガ、ヒノキア
スナロなどの巨木が繁々

【執筆プロフイー
ル】住田町下有住新切生
まれ、七十三歳。盛高校
(現大船渡高校)上有住
分校をへて岩手大学芸学
部。卒業後県公立学校教
員となり、一九九五年に
退職。金ヶ崎町民生児童
委員、生涯教育審議会委
員、都市計画審議会委員
などを務め、現在は社会
福祉法人理事、日本野鳥
の会、日本鳥類保護連盟
会員。五葉山へは妻、娘、
息子夫婦らと五回ほど登
った。

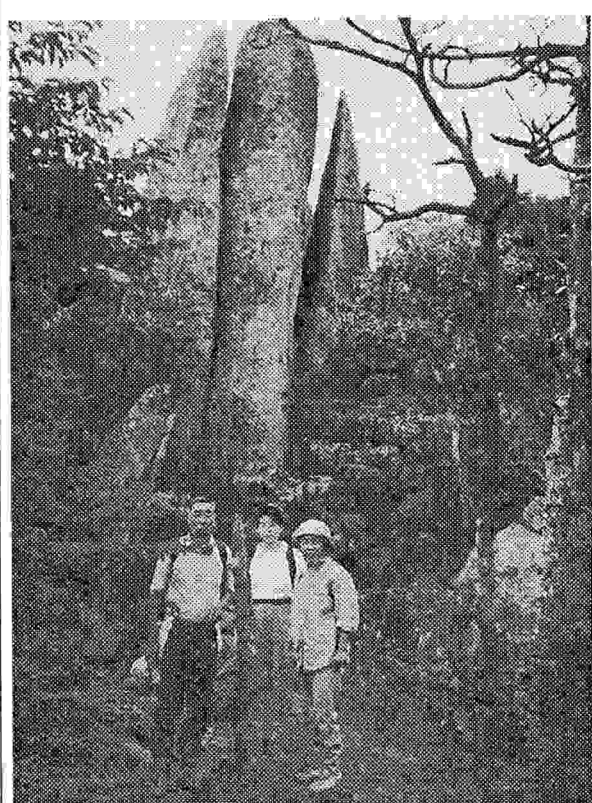
母のような温もり

金ヶ崎町西根 立花 邦夫

に困り、新切(住田町下
有住)では奥山に入って
ワラビの根を掘り、根餅
で命をつないでいた。ワ
ラビ掘りの時は家中全員
で働いた。吹雪の中の水
仕事もあった。

でも、夏になると、五
葉山麓からの流れの気仙
川はアユの釣り人で賑わ
った。私も小学校三年生
で釣りを覚え、イワナや
ヤマメを釣った。

学校から帰ると、すぐ
裏の新切川へ釣りに行っ
た。



日の出岩前で家族と。左が筆者(1998年8月)